

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The North Pacific Rim as a Linguistic “Old World”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮岡, 伯人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001189">https://doi.org/10.15021/00001189</a>

## 言語的「旧世界」としての環北太平洋

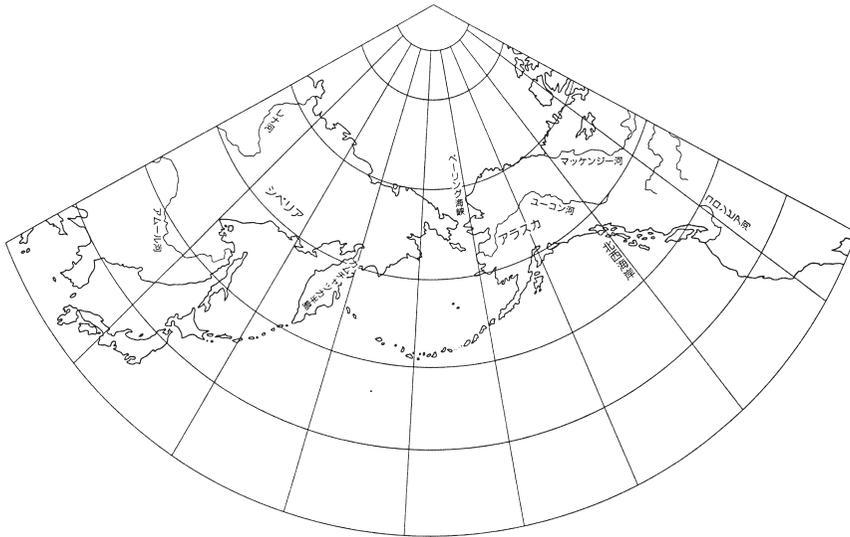
宮岡 伯人

### 1. ジェサップ探検と北アメリカ先住民言語分類

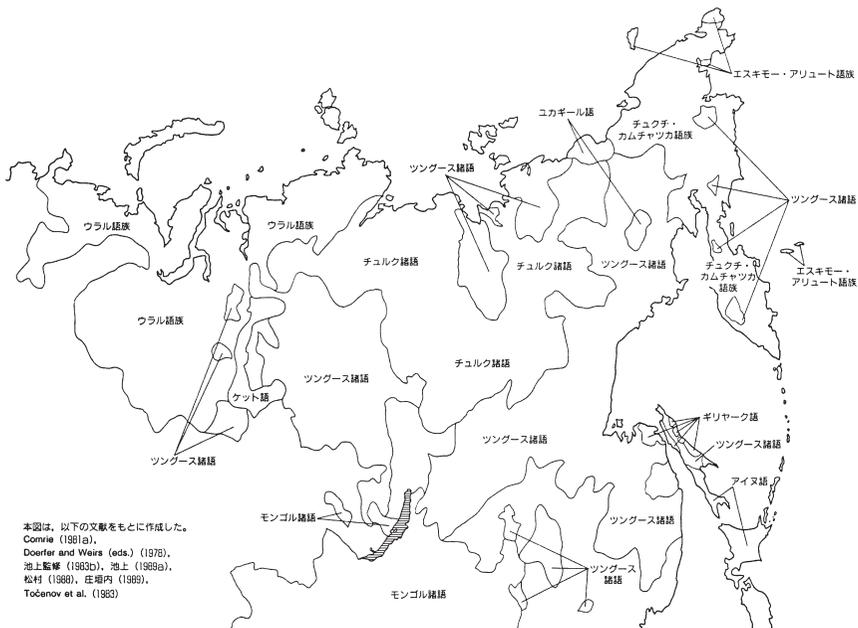
1896年、アメリカ自然誌博物館主任 American Museum of Natural History, Curator of Ethnology and Somatology となり、あわせてコロンビア大学でも教鞭をとりはじめたボアズ (Franz Boas, 1858-1942) にとって最初のおおきな計画は、アメリカ・インディアンがベーリング海峡をわたって旧世界から新世界にやってきた、という仮説に光をなげかける証拠を両大陸に求めることにあった。この考えに興味をもち、財政支援をおこなった同博物館理事長モリス K. ジェサップ (Morris K. Jesup) の名を冠したジェサップ探検 Jesup North Pacific Expedition は、コロンビア川 Columbia R. からアムール川 Amur R. を視野にいたボアズの企画・組織化によって推進された。

ボアズは、周知のとおり人類学を中心に幅広い分野での仕事をのこし、おおくの弟子を育てたが、みずからは周囲に、「人類学のどんな分野よりも得意で興味があつたのは言語学だ」とも「言語の仕事がじぶんにはもっとも向いている」とも語っていた (JAL 11(2): 97)。言語学者としての力の確かさは、たとえばそのナ・デネ語 [2]・トリンギット語 Tlingit の『記述』(Boas 1917) が、わずか6週間の調査でしかなかったにもかかわらず、(難解で知られる音素体系の正確な把握をはじめとして) すぐれた文法になっていることから知られる。北アメリカの言語(語族)名につづく [ ] 内の数字は、地図3・4(宮岡編 1992: 62-65より)のそれである。そのボアズがジェサップ探検における言語学の成果としてあげたのは、つぎのような諸点であった (Boas 1905: 95, 97):

- a) 形態法からみると、北東アジアの言語(地図2参照)はウラル・アルタイ Ural-Altaic 諸語には関係しない
- b) チュクチ Chukchee, コリヤーク Koryak, カムチャダール Kamchadal の言語はたがいに密接に関係し、アメリカのおおくの言語とおなじく複統合的(輯合的) polysynthetic であり、その上、動詞に名詞を抱合 incorporate する点で、典型的なアメリカの言語に類似する。おなじことは、程度はおちるが、ユカギール語 Yukaghir にもいえる
- c) おおまかな分類では、北東シベリアの言語は、アメリカの言語とおなじグループにはいる
- d) ハイダ語 Haida [3] とトリンギット語は、ツィムシアン語 Tsimshian [45] とはまっ

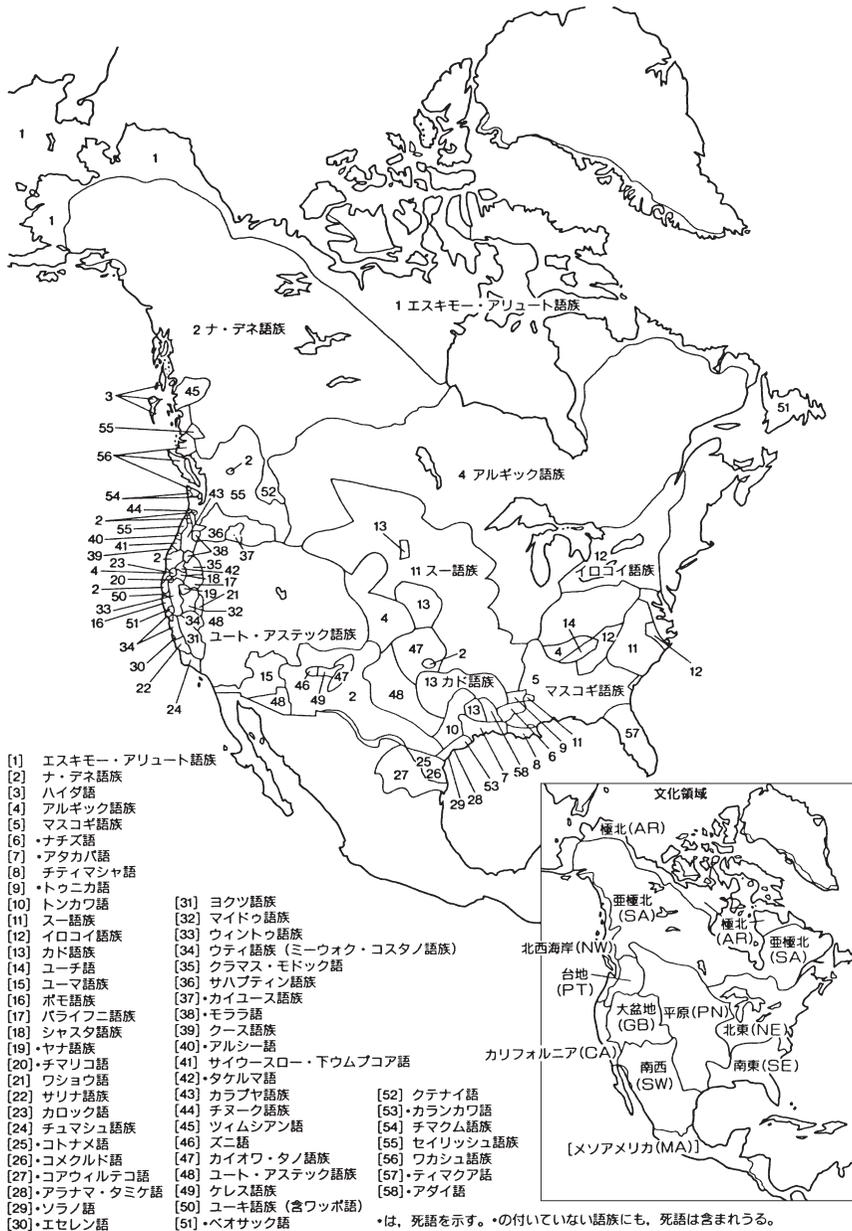


地図1 環北太平洋域 (North Pacific Rim)



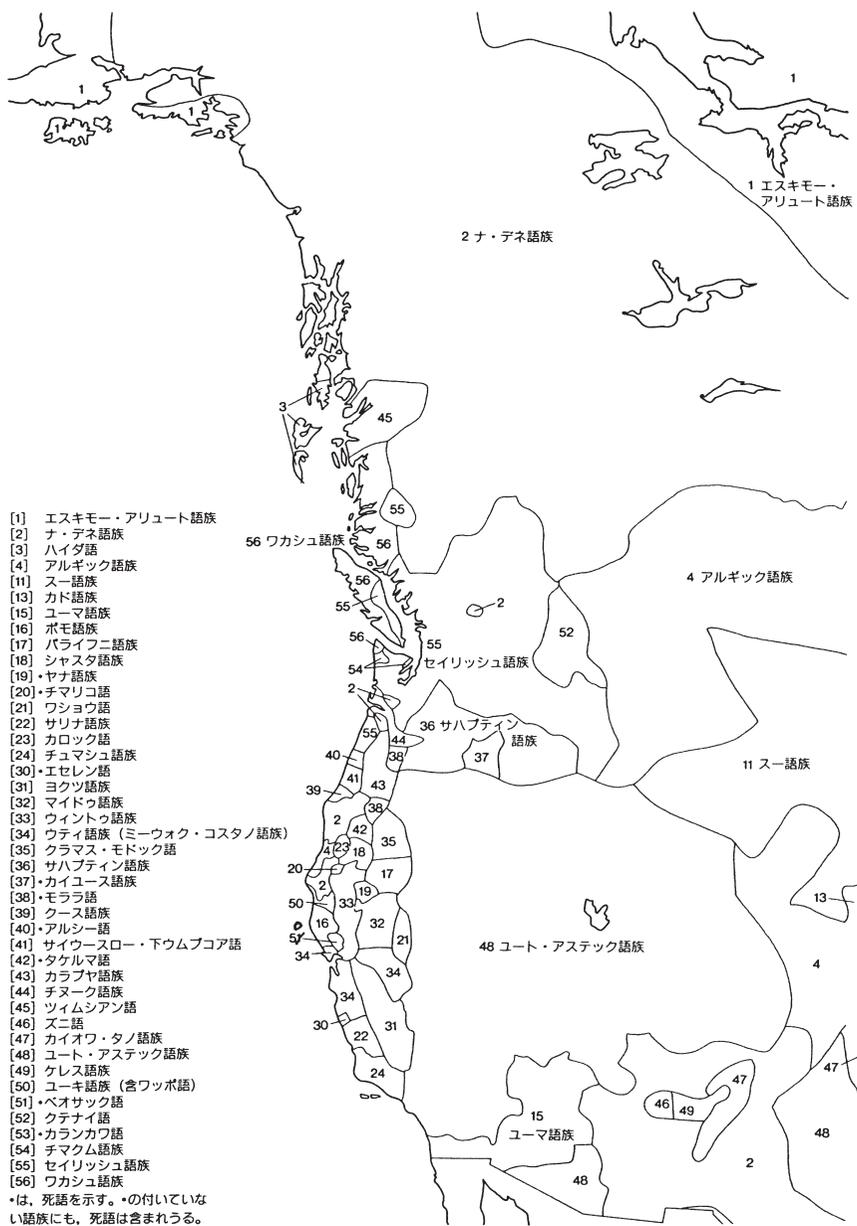
地図2 北アジアの言語

たく異なっている。ハイダ語・トリングット語は、形態法の特徴からむしろアサバスカ語 Athabaskan [2] に似ている。



地図3 北アメリカの言語

ちなみにボアズは、北西海岸インディアンとこれら北東シベリア諸族との強い連続性を考える一方で、エスキモーは、(もとより極北における考古学研究的進展によってその後、否定されてしまったが) おそらくカナダのマッケンジー川 Mackenzie R. 近くあるいはその東にあった故地 Urheimat から西にむかい (つまりデンマークの Henrik Rink



地図4 北アメリカ北西部の言語

1887 以来の内陸起源説), 比較的新しく太平洋側に進出して、この連続に楔をいれたとする、いわゆる wedge theory を採っている (参考、宮岡 1984: 渡辺 1992: 159-160)。また、ギリヤーク Gilyak (ニブフ Nivx) とアイヌ Ainu については、これらと他の北東シベリア諸族との関係は将来の研究に俟つとして推論を控えている (Boas 1905: 98-99)。

さて19世紀末の段階では、メキシコ以北の北アメリカには、先住民つまりインディアンとエスキモーの言語 North American Indian Languages にたいし、60 ちかい語族がたてられていた（1891年の「パウエル Powell 分類」——宮岡 1992a）。これら数多い語族間の関係を解きほぐし、より少ない数の語族にまとめあげようとする語族大統合 super-grouping/lumping の試みがその後つづいたが、これをとりわけ積極的にすすめたのは、ボアズの育てた秀逸の高弟サピア（Edward Sapir, 1884-1939）であった。はやくも1920年には、北アメリカ先住民言語を6大語族 super-stocks/major linguistic groups に纏める構想の骨格がサピアにはできあがっていた（兄弟子クローバー Alfred Kroeber (1876-1960) 宛書簡 1920/10/4 —— Golla 1984: Let. 316; Sapir 1921; 1929）。このサピア分類にかんする諸問題、北アメリカの語族統合のサピア以前と以後における展開については、宮岡（1992a, 1992e）参照。

さらにこの後、1920年から1925年頃までサピアは、ジェサップ探検の一員であった東洋学者ラウファー（Berthold Laufer, 1874-1934）とも書簡を交わし意見をもとめつつ、6大語族のひとつナ・デネ語族（Na-dene [2] ——サピアがこれに含めていたハイダ語は、今日では孤立言語とされている [3]）——とシナ・チベット語族 Sino-Tibetan の同系性を追求していた（cf. Anonymous 1925 匿名だがその筆者はサピアだと推定されている）。このサピアにとって語族大統合の狙いは、まず北アメリカ大陸の驚くべき文化的多様性を言語関係によって整理すること、言いかえれば、同大陸における先住民の移住という文化史を反映する分類を得ることにあつた。しかしそれはまた、旧大陸との関連を視野にいれた整理であり、ほかならぬ師ボアズがジェサップ探検からえた見通しに実質的基礎をあたえようとする意図が、そこにこめられた分類であると言える。

ひるがえってボアズは、北西アメリカと北東アジアの関係に関心をもちつづけ、ここでの言語的証拠を重視する基本姿勢に変わりはなかったが、サピアのすすめた語族大統合には否定的態度をあからさまにした。ただその後年、チュクチ語とエスキモー語が文法構造、語彙、音声原則が基本的に異なりながら、一定の文法的分類に著しい類似があると指摘し、そこにあまり古くには遡らない形態法の相互影響の可能性を示唆しているのは注目に値する（Boas 1933: 367-70）。

ボアズとサピアは、言語の分岐についての考えかた、したがって語族分類の基本については、（おそらく）最後まで溝の埋まらぬ意見対立があつたが、両者が共通して没入しつづけたのは、北アメリカでも太平洋側（北西海岸とカリフォルニア）の諸言語であった。この「環北太平洋 North Pacific Rim」（2節）のアメリカ側は、地球上でもすぐれて言語的つまり類型的かつ系譜的な多様性のたかい地域なのである。それ故に、ボアズとサピアそれぞれに、特色ある言語学の形成におおきな影響をおよぼした言語世界である。

しかしジェサップ探検以後の一世紀間、(詳説する余裕のない) さまざまな背景があつてのことだが、この言語世界についての知見はさほど深まっていないのが現実である。とくに個々の言語の基礎的資料の記録・記述 documentation は十分にすすんだとはいえない。にもかかわらず、世界の他地域とおなじくこの一世紀のあいだに弱小言語の急速な消滅と衰退が加速化し、現在、(日本語・朝鮮語と一方、すでに消滅した言語は措き) 環北太平洋の言語はすべて、話者数がおおくて約一万人から残りわずかに一名という、すべて「危機に瀕した endangered」あるいは「消滅寸前 moribund」の言語である(宮岡・崎山 2002 ならびに Krauss 2003 参照)。

我が国では、消滅に瀕した環北太平洋の言語の記録・記述を目的とする調査研究の組織化が1980年代末からはじまり、現在、30名を優にこす研究者によって個々の言語の記録・記述がすすめられている。その今日までの成果の一部は、Miyaoaka *et al.* (2007) に、近年の組織的活動(平成11年度~15年度文部科学省特定領域研究:環北太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究)は、その120巻にちかい刊行物(ELPR シリーズ)あるいは <http://www.elpr.bun.kyoto-u.ac.jp> にみることができる。

## 2. 環北太平洋とは

あまたの真摯な努力にもかかわらず、いまだ系統的には孤立した言語とされている日本語や朝鮮語の周辺は、それぞれきわめておおくの言語からなるオーストロネシア語族 Austronesian, シナ・チベット語族、そして(系統的な統一はなさぬとしても、一定の類型的な刻印のおされた) いわゆるアルタイ諸語の語域が<sup>びょう</sup>渺とした広域分布をなしている。ところが、北東方面に目をむけると、そこだけは、いずれも語域のせまいアイヌ語、ニブツ語、ユカギール語のような、日本語とおなじく孤立言語 isolated languages か、さもなければ、チュクチ・カムチャダール語族 Chukchee-Kamchatkan, エスキモー・アリュート語族 Eskimo-Aleut のような、少数の同系語(姉妹語)を擁しはするものの、他との系統関係は不明な孤立した小語族 small families が連なるのみである。このような孤立した言語や小語族の連なりは、さらに<sup>いしゅう</sup>蝟集の度を密にしながら、ベーリング海峡をこえ、北アメリカ北西部に続いている。これらの言語分布は、地図1~4を参照されたい。

上記のうちエスキモー・アリュート語族だけは、分布の中心がむしろ新大陸にある。そのために、伝統的にこれをふくめて扱う北米インディアン諸語については、サビア以後、語族大統合主義とこれに反対するいわゆる分割主義 splitting の流れがつづくが、いまその具体は措くとして、異論のあまりない穏当な(後者の立場にたった)分類にしたがうならば、60ちかい語族(孤立言語もひとつの系統的単位すなわち語族とかぞえ)が認められ、(分類の質はともかく)その実数じたいは19世紀末のパウエル分類とかわっていない。地図3・4は、58語族をたてている(参考、宮岡1989a; 1992a; 1992d)。

ここで刮目すべきは、58 語族の 6 割にあたる 35 語族が北アメリカのごく狭い北西部に語域をもつ語族であり、しかもそのうち北西部の外に語域がのびているのは 5 語族にすぎない、という事実である（地図 4 参照）。さらに、このような地域的に偏って、おおくの語族が蝟集する北西部とは、アメリカ人類学の文化領域 culture area でいえば、「極北 Arctic」と「亜極北 Subarctic」のそれぞれ西端部、「北西海岸 Northwest」, 「台地 Plateau」の一部、「カリフォルニア」からなるが、いくぶん度のひくい語族蝟集をしめすメキシコ湾岸を中心にした南東部をのぞくと、他の北アメリカ諸地域以外は、語域が比較的ひろい、きわめて少数の語族で占められているのである（地図 3）。ちなみに大統領主義の試みは措き、Campbell (1997: 107-55) にしたがうと、新大陸には約 150 の語族（系統的単位）が立てられ、これに匹敵する多様さは南洋州 Australasia の 85 ないし 90 語族に——うち三分の二以上がニューギニアに——みられるのみで、ユーラシアとアフリカはそれぞれ 37 と 20 語族である。北アメリカ北西部だけで、ユーラシア全体に匹敵する系統的多様性があることになる。なおニューギニアについては、ここが世界でもっとも系統的多様性のたかい地域として知られてきているが、（類型・系統）研究のいまだ不透明さがこの現状では、そのいわゆる多様性が、（語族）数の上ではほぼ同次元の北アメリカのそれに対比しうるかどうか、いまだ即断は控えなければならない。

以上のような、日本列島・朝鮮半島から、ひとまずこれとほぼ同緯度のカリフォルニアへと弧をえがく、北太平洋に面した、この環北太平洋地域は、まず系統的な多様さあるいは不透明さがきわだった語族蝟集の回廊である。と同時に、類型的な面白さの妍を競いあう言語の園でもある。当然といえば当然、系統的多様性とこれに見合うだけの類型的多様性がベアになった言語世界なのである。北東アジアの言語には、（上記ボアズがつとに指摘したような）北アメリカにあったほうが類型的に据わりのよいものもあるといった、類型的多様性の具体には、ここでは触れることはできない。いまだ片々たる概観ではあるが、宮岡 (1992d) を参照されたい。

北太平洋をはさんで対峙する北東アジアと北アメリカ北西部のあいだには、かねてより民族学や考古学の立場から、さまざまな文化的類似と関連性が指摘されてきた。しかし、うえで一定の地域的限定をくわえた環北太平洋にほぼ相当する地域をひとつの文化圏として積極的に提唱してこられたのは、故渡辺<sup>ひとし</sup>仁博士であり、その「北太平洋沿岸狩猟採集民文化圏 Northern Pacific Maritime Hunter-Gatherer Culture Area（略して「北洋沿岸文化圏」）構想は、しだいに体系的かつ精緻な形に発展をとげていった（渡辺 1988; 1992 参照）。「北方」の生態系に着目した、文化の統一的連続体を日本と北アメリカに認める視点は、日本人研究者によって、その後も実質的な強化がはかられてきている（Irimoto 2004 参照）。

### 3. 日本語——言語的新旧両世界の接点

それでは、環北太平洋の、日本語を弧の一端として連なるいちじるしい語族蝟集と、これとは対照的な、その西や南にみられる少数の語族や諸語の広域分布（前節）は、それぞれなにを物語るものであろうか。はるかな太古は措き、現在、世界の言語がしめす分布にも、未踏の言語生態的ニッチへの進出であったことが容易に肯ける分布もたしかにある。だが、広域にまたがる言語・語族の分布は、とりわけ文化的優位にささえられた緩急さまざまな拡散力によって、先住の弱小言語を同化あるいは吸収し消滅に追いやった結果であるのが一般的である。そこには、抗しきれずに同化され消滅した弱小言語や小語族が眠っているにちがいない。このことは、たとえばインド・ヨーロッパ語族 Indo-European の、今日まで世界の他言語あるいは他語族を蚕食してきた、つよい拡散力とその結果からも明らかであろう。しかしこの種の広域分布は、同語族にかぎったことではない。

日本語をおおきく取りまく、オーストロネシア語族、シナ・チベット語族、アルタイ諸語の広域分布もまた、社会・歴史的な背景や具体的な経緯はまちまちではあっても、かつて存在した可能性のたかい系統的ならびに類型的多様性を不完全ながらも均<sup>なら</sup>してきた結果かもしれない、そのかぎりにおいては、いわば「新しい」言語世界なのであろう。これにたいし、環北太平洋の語族蝟集は、むしろ、一定の系統あるいは類型に均<sup>なら</sup>しきられる以前の、いわば一段「旧い」言語世界なのではあるまいか。粗<sup>そ</sup>笨<sup>ほん</sup>の譏<sup>そし</sup>りは覚悟の前、もしこのような推断が許されるとすれば、いわゆる新大陸とそこへの移住の門口であった北東アジアは、言語的にはかえて「旧世界」であり、旧大陸（ユーラシア大陸）の大部分こそ「新世界」だということも可能である。とすれば日本語は、こういった意味での言語的新旧両世界のまさしく接点に位置している言語だとする捉えかたも、あながち牽強附会ではあるまい。

日本語はこれまで、系統であれ類型であれ、北アメリカはおろか北東アジアの言語世界との関連はほとんど閉却されてきた。しかし、もしその日本語が言語的新旧両接点あるいは環北太平洋の弧の一端に位置しているとするならば、どうであろう。日本語の来由をめぐる問題には、すくなくとも、この言語的旧世界の諸言語と関連または共通する部分（問題）がありうるというのは、考えられぬことではない。日本語は、いまだに一元的な系統論の試みが絶えないなか、多元的な「形成」を問いもとめるべきだという認識が理解と共感をえはじめている（崎山 1990 参照）。その一方、多様な角度から日本語系統論のあらたな模索がはじまっている（Vovin and Osada 2003）。ともあれ言語の多元的形成は、まさしく日本語がその一部をなす環北太平洋の言語的多様性の背景に探りをいれるうで、避けてとおることのできない、きわめて重要な問題にちがいない。

#### 4. 多様性の背景

言語的旧世界とはいえ、そもそも新旧は相対的なことだとすれば、環北太平洋の言語がしめす系統的多様性あるいは不透明性と、これに相関する類型的多様性には、やはりその背景となる前史があるのはいうまでもない。

環北太平洋に分布するのは、弧の南西端（日本語と朝鮮語）をのぞくと、おしなべて狩猟採集をおもな生業とする少数民族ばかりである。そのころ陸橋 land bridge であったベーリング海峡域 Beringia を中心とした（亜）極北部——北アメリカの文化領域としての「極北」と北東アジアの極北部——は、新大陸へのモンゴロイドの移住経路にあたっていただけに、おそらくさまざまな集団の言語が他の言語と接触し絡みあうなかで、それぞれ拡散と衰微（さらには消滅）をかさねてきたことであろう。しかし、（亜）極北の自然環境は苛酷であり、おのずと人口密度は極端にひくい。（他系統の言語による同化吸収にくわえ）いきおい言語連続体のあちこちで一言語（方言）ごとごとそり陥没するようなこともおこりやすく、消滅をまぬがれた言語のほうが例外的な僥倖<sup>きようこう</sup>であったとさえ言えるかもしれない。事実、今日、（亜）極北に残っているのは、おそらく語族的断片とでもいえる小語族か、同系の姉妹語をまったくうしななった孤立言語ばかりである。他言語との歴史的な関係を探るには、おのずと手がかりは乏しい。さらに、消滅が同系の言語すべてにおよんだ場合は、異系言語の基層におぼろな痕跡でも残していないかぎり、語族全体のたどってきた道は、あたかも水没した陸橋の底に消え、かつての存在じたいさえ知る術もない。これにたいし、自然環境の恵まれた、より南の地域では、言語と語族の蝟集がいまものこり、とくに北アメリカ側は、ベーリング海峡域から「北西海岸」、「カリフォルニア」へと南下するにつれて、しだいに蝟集度がふかまっている。

それでは、強力な拡散力をもつ特定の言語や語族によって均しきられることのなかった、環北太平洋の言語世界（旧世界）がしめす類型的多様性と系統的な不透明性は、なにに由来するものであろう。その生じてきた過程の解明こそこれからの課題なのであるが、一元的な分岐 divergence でかたづくものではないのは明らかである。おそらく、狭い地域に犇<sup>ひし</sup>めきあう諸民族が、長期にわたる、言語間の接触<sup>な</sup>というだけではおそらく生ぬるい角逐、そこに働いたさまざまな言語変化のメカニズムとプロセス、あらたな言語形成などの可能性を想定しなければ、理解のつくものではなからう。言語あるいは語族によっては、せめぎあう複数の言語が一本の綱に縋<sup>な</sup>いあわされてきた永い歴史を秘めていることもあろう。分岐（系統樹）モデルにはじめはそれなりの信をおいていたポアズが H・シューハート Schuchardt らとは独自に、しだいに語族の不確定性、分岐とは対極的な統合や収斂、のちの言語領域 linguistic area に匹敵する地域の存在、言語の多元性や混濁 mixture などを語るようになったのも、まさしく北西部の、複雑な言語事実が錯綜する、奥行き深い言語世界に分けいるあくなき努力のなかからであった（宮岡 1992d）。

錯綜した言語状況に手練りをいれようとする場合、語彙借用はさほど手がかりを与えてはくれない。語(族)域の一部が隣接する異系の言語から音面や文法面に影響をうけたことが明らかな例も枚挙にいとまがないが、ひとつカリフォルニアの湖畔ミーウオク語 Lake Miwok [43] は、他の姉妹語から地理的に分断され、それぞれ系統の異なるパトウィン語 Patwin [42]、ポモ語 Pomo [16]、ワッポ語 Wappo [56] に<sup>いによ</sup>圍繞されている結果、地域ごとに異なるそれら異系言語の傍層的 substratum 影響をうけた「カメレオン言語」となっている (Callaghan 1964; 宮岡 1992b 参照)。

複数の語族域にまたがる地域が、連続的に分布する一定の音的あるいは文法の特徴の束によって彩られて、言語領域を浮彫りにさせている事実は、はやくから研究者の注目を惹いてきた。言語と語族の蝟集する北西部では、そのような地域・類型の特徴の束が交錯しあうこともまた稀ではない。言語領域なのか語族なのか、とくに判断がむずかしい例としては、いわゆるモース諸語 Mosan Languages がある。北アメリカにあって絢爛たる輝きをはなつ北西海岸文化の代表的な担い手たちのワカシュ語族 Wakashan [56]、セイリッシュ語族 Salishan [55]、チマクム語族 Chimakuan [54] が同系である可能性が1920年頃から主張され、この名で纏められもした。とくに形態法上、さまざまな類似があり、動詞の目的語や主語項 arguments としてさえ機能するかにみえる特異な語彙的(名詞的)接尾辞 lexical (nominal) suffixes の共有はとりわけ興味ぶかい。しかし、音対応に難があるなど、この同系説が当たっているのかどうか、容易に「当確」をだしにくいのが実状のようである (宮岡 1992c 参照)。

解釈に一部、異論はあるが、しばしば言語混淆の引合いにだされるのが、カムチャッカ半島東方沖のコマンドル諸島 Commander Islands の銅島 Copper Island のメドヌイ Medny・アリュート語である(アツツ Attu・アリュート語の動詞語幹+ロシア語の定動詞活用などを特徴とする)。これは、ロシア人との接触後のこととて、形成されてきたそのゆくたてがそれなりに知られている、むしろ特殊な場合である(参考、匹田 1992)。他方、北西海岸の、ふつうナ・デネ語族 [3] にふくめられるトリンギット語は、おなじく言語混淆 language mixture の産物だとする見方がつよいものの、非ナ・デネ系言語との混淆なのか、同系言語との混淆なのかについては、意見がわかる。

ピジン・クレオール化現象は、言語の成立と発達にはけって珍しくない。北アメリカ北西部では、メラネシアの tok・ピジン Tok Pisin のような確立をみたものはないが、そのほぼ全域に弘まっていたピジンのチヌーク・ジャーゴン Chinook Jargon がつとに有名である。北西海岸諸族の交易の仲介役であったチヌーク族の下流チヌーク語 Lower Chinook [44] を基礎に成立し、のちに、ヌートカ語 Nootka (ワカシュ語族)、チハリス語 Chehalis (セイリッシュ語族)、さらには、フランス語、英語の語彙をくわえつつ、整備され、勢力をましていったとされるこのピジンは、交易の手段にとどまらず、一部の地域では、遠隔の言語間における語彙借用の仲介をもはたしつつ、神話や物語の伝承

にも役だった。勢力のもっとも盛えた19世紀末には、チヌーク族の一部でクレオール化しているという観察もあった。これを話せる人はもはや存在しないと推定されているが、ツィムシアン語 Tsimshian [45] の村（ハートレイベイ Hartley Bay）では、チヌーク・ジャーゴンの歌がいまも人々に歌われているという（笹間史子さん談）。

環北太平洋は、古い時代の言語資料が皆無であり、ほぼ言語状況の概略がつかめるようになったのも新しい地域である。そのために、たんにひとつの見通しでしかないが、類型の多様化をうみ、系統関係を不透明にしてきたのは、とりもなおさず、小さな言語が噌集し、それだけに激しい言語接触と絡みあいが連続と続いてきたなかで、上述のような、おそらく程度も種類も超えた諸変化がづいてきたその累積によるものであろう。しかもここが牧畜民でも農耕民でもない狩猟採集民の文化圏であるとすれば、他所とは趣を異にしたタイプの言語接触と言語形成があった可能性も考えておかねばなるまい。

環北太平洋では、ボアズ時代に較べると、研究調査に確かな進展はあった。しかし、巨細にわたって詳しい記述ができた言語はいまだにほとんどなく、しかもすべて存亡の危機にたつ言語ばかりだとすれば、焦眉の急は明らかである。現状を概観するには、Krauss (2003) と Miyaoka *et al.* (2007: chs. 19–23) に就いていただきたい。まずなんとしても記述の整備がはからなければならないが、そのうえで、能うかぎり系統と類型の多様性の背景にふかく踏み込むのに必要なのは、個々の言語の構造とその地域の変異や言語史の深みにいまだ「沈澱」しているやもしれぬ微かな痕跡をも見落とさない、言語の具体にたいする懐の深い取りくみと濃やかで鋭いあつかいであろう。たしかに絶望的にちかい、条件の厳しさ、問題の難しさは、承知の前だとしても、旧くは世界各地でむしろ常態でさえあったかとも考えられる多様性をいまにとどめる環北太平洋は、言語の史的 연구にも類型的研究にも、得難い実りをもたらしうる可能性を宿した豊饒な言語世界であることは銘記しておきたい。

そのなかで、西シベリアのエニセイ川下流や中流を語域としてきたエニセイ語族のなかでほぼ唯一、話者が残るケット語 (Ket) につき、つい最近、これと北アメリカのナ・デネ語 [2] との同系関係がおおむね確証されつつあるのは、厳密な比較研究のなし遂げえた、特記にあたいする快挙である。これは、Edward Vajda 氏 (Western Washington U.) の現地調査をふくむ長年の努力の結実であって、その地理的隔たりの大きさにもかかわらず、さきにも触れたような語族大統合の類ではけっしてない。両言語は、それなりに稀な接頭型複合（輯合）性の言語だというだけでなく、きわめて特異な動詞形態法が酷似し、動詞語幹に先行する要素が（語頭にちかい）disjunct と（語幹にちかい）conjunct に分かれるその区分と細部が対応するなどには、とくに問題が「かたち」（宮岡 2002; Miyaoka 2007）にかかわる事だけに、説得力のある同系説だとみなければならぬ。これがいわば公表されたのは、2006年と2008年2回のシンポジウム（ラ

イプチヒとアラスカ) の場でしかなく、氏による論文・書物などの発表物はいまだない。同氏は、謙抑にまだまだ証明不足を口にしてはおられるが、関係両言語の専門家だけでなく、北方地域にとくに関心のふかい比較言語学者は、おおむね賛同あるいはすくなくとも積極的な受けとめかたをしている。北方あるいは環北太平洋の言語分布の問題に一つの突破口をもたらさざるをえない画期的な同系説である。

## 5. 追記——言語分布からみた北アメリカ先住民の拡散

北西部における語族蝟集、いいかえれば、北アメリカにおける語族分布の地域的偏りは、同大陸の先史の重要な問題とかかわっている。モンゴロイドが北東アジアからベーリング陸橋を超えて、北アメリカ先住民 Aboriginal Americans として北アメリカ大陸各地に定着していった移住経路は、東のロレンタイド氷床 Lawrentide と西のロッキー山脈から流下するコルディレラ氷床 Cordillera にはさまれ、それら氷床の前進と後退によって時期的に広狭まちまちながらも、内陸アラスカ Interior Alaska から南につながっていた無氷回廊 Ice-free Corridor であり、氷床がきれたあたりから方々に拡散していったとする説がひろく知られている。これにはしかし、われわれのもつ言語的事実からすれば、理解しがたいところがある。

無氷回廊地帯は、今日では、ナ・デネ語族 [2] の下位語族であるアサバスカ語族の北アサバスカ諸語がもっぱら占める「亜極北」文化領域にあたる。アサバスカ語族が、おそらくアラスカにあったと推定されているその故地から拡散していったのは(参考、宮岡 1984)、比較的新しい時期である。しかし、もしここが旧くからの南下経路であったとすれば、「亜極北」が言語系統的にはまったく斉一であり、非アサバスカ語的な言語の島 language island も見あたらなければ、先住の異系言語との交錯を窺わせるものも見いだしがたいのは何故であろう。アサバスカ語は、インド・ヨーロッパ語のような、文明に支えられたつよい拡散力をもっていなかった狩猟採集民の言語であることも忘れてはなるまい。そこへさして、氷床の南側を東西に比較した場合、言語の系統的多様性は、西端の北西部が著しくたかく、それより東(「平原 Plain」, 「北東部 Northeast」, 「台地」の一部)は、氷床のきれたあたり(現モンタナ州周辺)をもふくみ、全体的にきわめて単調なのは何故なのであろう。

植物の変種の多さと原産地の関係に似て、分岐の彫りがふかい言語があつまる地域には、その彫りが深まるにたる定着の時間的長さが必要である。分布に特別の攪乱が二次的におこっていないかぎり、一語族内における言語の分岐の地域的偏りは、その語族の故地のおおよそのありかを示すと考えるのは、まさしくこの点に拠っている(宮岡 1984)。語域が(一部でも)北西部にあって、言語分岐がそれなりに全体とすすんでいる語族は、一般に、西から東にすすむほど分岐度がひくくなる(例、セイリッシュ

語族, アルギック Algic 語族 [4], ナ・デネ語族)。語族の拡散の中心が西に偏っていることをしめす事実である。おなじく, 個々の語族のレベルをこえても, 「亜極北」, 「平原」, 「北東部」の系統的単調性とは対照的な, 北西部とりわけ「北西海岸」と「カリフォルニア」の語族蝟集と系統的不透明性からは, そこにおける人間の定住の相対的な古さを想定せねばなるまい。1960年代はじめから唱えられてきた (C. J. Heusser *et al.*), 陸橋をこえた以後の南下が北西部の沿岸をすすんだとする沿岸回廊南下説は, 近年 (とくにカナダの考古学者によって), 北西部の先史の深みが明らかになってくるにつれ, かつて氷河が張りだしていた北西海岸も, おそくとも一万年前にはすでに人の移住が可能であったとする知見などをもとに, より積極的な支持をえてきている。北西部にみる系統的重心が北西部にあるという言語的事実は, もとよりそのネガティブな性格上, 積極的に無氷回廊地帯南下説を否定しうるものではないが, われわれの知る北アメリカ先住民にかんするかぎり, 言語学的知見と平仄<sup>ひょうそく</sup>があうように思われるのは, 無氷回廊南下説ではなく, 沿岸回廊南下説である。

本稿は, (宮岡 1989a) を元に大幅な書きかえと追加を施したものである。無氷回廊など, 南下経路の環境条件については, 小野有五教授 (北海道大学) からご教示を賜わった。記して謝意を表したい。

## 参考文献

小野有五

1989 「無氷回廊をこえて」『モンゴロイド』(平成元年度文部省科学研究費補助金重点領域研究「先史モンゴロイド集団の拡散と適応戦略」事務局), pp. 11-13.

崎山 理

1990 『日本語の形成』三省堂。

匹田 剛

1992 「帝政ロシアの東方進出とロシア語の先住民諸言語に与えた影響」宮岡伯人編『北の言語 類型と歴史』pp. 327-341, 三省堂。

宮岡伯人

1984 「言語の分化からみた故地 エスキモーとインディアン」和田佑一・崎山理編『言語人類学 現代の人類学 3』pp. 112-128, 至文堂。

1989a 「北アメリカ先住民の言語 インディアンとエスキモー」『月刊言語』18(7): 22-29.

1989b 「チヌーク語族」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『世界言語編 (中)』(『言語学大辞典』(第2巻) pp. 730-733, 三省堂。

1992a 「北米インディアン諸語」『言語学大辞典』(第3巻・下-1) pp. 1004-1078, 三省堂。

1992b 「ミーウォク語族」『言語学大辞典』(第3巻・下-2) pp. 242-243, 三省堂。

1992c 「モース語族」『言語学大辞典』(第3巻・下-2) pp. 457-459, 三省堂。

1992d 「環北太平洋の言語」宮岡伯人編『北の言語 類型と歴史』pp. 3-65, 三省堂。

1992e 「[解説] 奇傑ハリントンをめぐる巨匠たち」キャロバス・レアード編一ノ瀬恵訳『怒れ

- る神との出会い 情熱の言語学者ハリントンの肖像』 pp. 261–296, 三省堂。
- 2002 『語とはなにか エスキモー語から日本語をみる』 三省堂。
- 宮岡伯人編
- 1992 『北の言語 類型と歴史』 三省堂。
- 宮岡伯人・崎山 理編
- 2002 『消滅の危機に瀕した世界の言語 ことばと文化の多様性を守るために』 渡辺 己・笠山史子監訳, 明石書店。
- 渡辺 己
- 1992 「新旧両大陸の要」 宮岡伯人編 『北の言語 類型と歴史』 pp. 147–163, 三省堂。
- 渡辺 仁
- 1988 「北太平洋沿岸文化圏狩猟採集民からの視点 I」 『国立民族学博物館研究報告』 13(2): 297–356.
- 1992 「北洋沿岸文化圏 狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」 宮岡伯人編 『北の言語 類型と歴史』 pp. 67–107, 三省堂。
- Anonymous
- 1925 The similarity of Chinese and Indian languages. *Science* 62: 1607.
- Boas, F.
- 1905 [1902] The Jesup North Pacific Expedition. *Proceedings of International Congress of Americanists* (13<sup>th</sup>, New York), pp. 91–100.
- 1917 *Grammatical Notes on the Language of the Tlingit Indians*. University of Pennsylvania (The University Museum Anthropological Publications VIII–1).
- 1933 [1972] Relationships between North-west America and North-east Asia. In Diamond Jenness (ed.) *The American Aborigines: their Origin and Antiquity*. Published by the University of Toronto Press for presentation at the Fifth Pacific Science Congress in 1933 [reissued in 1972 by Russell and Russell, New York].
- Callaghan, C.A.
- 1964 Phonemic borrowing in Lake Miwok. In William Bright (ed.), *Studies in California Linguistics* (UCPL 34), pp. 46–53, Berkeley.
- Campbell, L.
- 1997 *American Indian Languages*. New York & Oxford: Oxford University Press.
- Golla, V.
- 1984 *The Sapir-Kroeber Correspondence: Letters Between Edward Sapir and A. L. Kroeber 1905–1925*. Survey of California and Other Indian Languages. Berkeley: University of California.
- Irimoto, T.
- 2004 Northern studies in Japan. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 5: 55–89.
- Krauss, M.E.
- 2003 The languages of the North Pacific Rim, 1897–1997, and the Jesup Expedition. In L. Kendall, and I. Krupnik (eds.), *Constructing Cultures Then and Now: Celebrating Franz Boas and the Jesup North Pacific Expedition*, pp. 211–221. Washington D.C.: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- Miyaoka, O.
- 2007 Linguistic Diversity in Decline: A Functional View. In O. Miyaoka, O. Sakiyama, and

M.E. Krauss (eds.), *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*, pp. 144–162. Oxford: Oxford University Press.

Miyaoka, O., O. Sakiyama, and M.E. Krauss (eds.)

2007 *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*. Oxford: Oxford University Press.

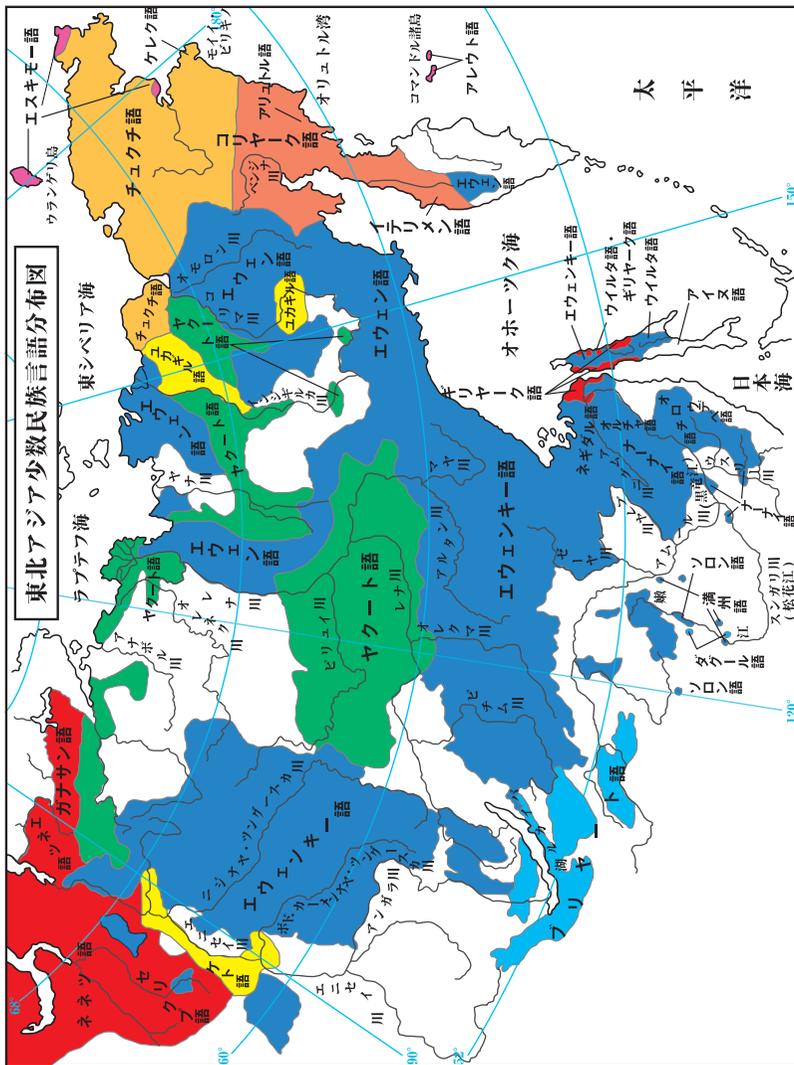
Vovin, A. and T. Osada

2003 *Perspectives on the Origins of the Japanese Language*. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies. 邦訳：アレキサンダー・ボビン・長田俊樹編『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター。

Sapir, E.

1921 A bird's eye view of American languages north of Mexico. *Science* n.s., LIV–1400: 408.

1929 Central and North American languages. *Encyclopaedia Britannica* (14<sup>th</sup> ed.) vol. 5. pp. 138–141. London and New York.



東北アジア少数民族言語分布図